

# アカデミック・ポートフォリオ

第三稿 作成日 2015年1月7日

吉川ひろみ

## 目次

I. はじめに	1
II. 活動の理念, その原動力	1
III. 教育	2
1. 教育の理念と方法	2
1) 作業レンズの普及	2
①COPM と AMPS	2
②プレイバックシアター	2
2) 主体性と自律性の促進	3
①ポートフォリオ面接試験	3
②学生からのコメント	3
③グループ課題と発表	3
④事例検討	4
2. 教育の責任	4
3. 教育の改善と成果	5
1) 作業レンズの普及	5
2) 主体性と自律性の促進	6
IV. 研究	7
1. 研究論文等	7
1) 作業レンズ	7
2) 主体性と自律性	9
2. 研究会活動	9
1) 作業レンズ	10
2) 主体性と自律性	10
V. サービス	11
1. 作業療法士の継続的専門能力発達への貢献	11
2. 作業療法発展のための貢献	12
3. 地域貢献	12
4. 教育と研究を支える業務	13
VI. 教育, 研究, サービスの統合	13

VII. ビジョンと行動計画	15
1. ビジョン	15
2. 行動計画	15
1) 作業レンズの普及	15
2) プレイバックシアターのスキルアップと機会拡大	15
3) 全ての人のための作業機会の拡大	15
VIII. おわりに	15

## 添付資料

1. ティーチング・ポートフォリオ（2014年9月22日作成）カバーページ
2. 日常を作業レンズで考える課題の例
3. チーム医療福祉演習の事例における作業療法の記述
4. プレイバックシアター演習の記録（専門科目，生命倫理学）
5. 学生のレポート（作業療法研究法，クリニカルリーズニング）
6. 学生からのコメント（専門科目，共通科目）
7. グループ発表資料（生命倫理学，作業適用学）
8. 担当授業のシラバス
9. 卒業論文，修士論文の研究報告一覧
10. 学生の授業評価
11. ヘルスサポーターマインド発達支援プログラムの報告書
12. 研究活動の詳細（研究論文，科学研究費補助金獲得）
13. 学会，研究会活動の詳細
14. 倫理セミナーの記録
15. 発行物（翻訳，COPM ニュース），研修会講師等の詳細
16. プレイバックシアター活動

## I. はじめに

このアカデミック・ポートフォリオ作成の目的は、自らの教育、研究、サービス活動を振り返り、効果的な循環を可能にするための糸口を探ることである。また、これを読んだ同僚や後輩が、ポートフォリオを作成したいと考えるようになることを期待したい。

## II. 活動の理念, その原動力

2008年9月、書籍を参考にティーチング・ポートフォリオを初めて作成し、主体的学習の推進が教育理念であることを確認した。その後は、学生が課題に取り組みやすいように、教員が要求する課題の明確化のための資料を作成したり、繰り返し説明したりしてきた。2010年7月にティーチング・ポートフォリオを更新し、教員の期待を明確にすることで学生は一定レベルまで達するが、期待以上の学習成果を見ることはないと感じた。2014年9月に、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップに参加し、メンタリングを通して目標が明確になった。そして、作業レンズ、COPMとAMPS、プレイバックシアターという私の教育活動における3つ柱が浮上した（添付資料1）。

作業レンズは、作業療法学科に入学してからずっと抱いてきた作業療法に対する疑念への現在の回答である。患者や障害者に作業をやらせて金をとる仕事に納得できなかった。病気や障害を治さないリハビリテーションの偽善や欺瞞が嫌だった。それでも、病院の片隅の狭い作業療法室で患者が、家族や介護者がびっくりするような才能を見せる場面が好きだった。病気だから、ここまでしかできない（Being→Doing）という考えではなく、「こうすればこれができる（Doing, Enabling）」に着目する作業療法が好きで、広めたいと思った。作業レンズをもつ作業療法士を育てる教育をしたい、世の中の人々がみんな Doing を重視すれば、心身機能や個人因子による偏見や差別をなくすことができるのではないかと考えるようになった。COPMとAMPS、プレイバックシアターは作業レンズを磨く手段に思えた。

今回アカデミック・ポートフォリオ作成のための資料収集を通して、倫理に関連する内容が多いことに気づいた。私が倫理に関心をもった理由には、成り行きと社会的・経済的必要性から選んだ作業療法という仕事を、納得できないまま続けてきたという矛盾があるのかもしれない。障害者の多くは心身機能障害が軽減できたからといって社会復帰ができるわけではない。慢性疾患と診断されたり、障害者というレッテルが貼られたら、普通の一般市民としての生活とは違う生活を強いる社会の方に問題があるのに、医療やリハビリテーションは、患者や障害者の中に問題があるという前提で仕事をしている。当事者不在、専門家優位のパートナーリズムが蔓延しているのである。私は倫理学の知識を知ることによって、解決困難な問題に対して、自分なりの考えを説明することができるようになった。これは、人が自律的存在として成長できる証であり、すべての人が倫理的主体者（ethical agent）となりうるという希望を抱かせる。自律的であるためには主体的でなければならない。こうして、主体性と自律性の促進が私のもう一つの理念になった。

クライアントがよい作業と結び付くことで健康になっていく、このプロセスを支援する作業療法を実践できるよう教育してきたつもりだったが、病院や施設に就職した卒業生の多くは、診療報酬制度に左右されるサービス形態に疑問を持たず、上司の要請に応じようとし、同僚と同質のサービスを提供しようとしていた。雇用主にとって都合のよい従順な職員として経験年数を重ねた卒業生が、理想的な実践をしようと意気込んで入職する後輩作業療法士

に圧力をかけていた。理想をもって就職した作業療法士であっても、COPM と AMPS で作業レンズを磨くことができたとしても一瞬だった。日常の職場に戻れば、再び「リハビリの先生」になっていった。主体性と自律性が伴わなければ、作業レンズを使い続けることはできないと考えた。

### Ⅲ. 教育

作業レンズの普及と主体性と自律性の促進を柱として、教育活動を整理する。

#### 1. 教育の理念と方法

##### 1) 作業レンズの普及

作業レンズで見ることは、自分が行うこと (doing) に着目することから始まる。学生の多くは、学校で学ぶ知識と現実に起きている自分の生活を結び付けることに馴染みがない。「何をすればよいか」を教員に問うことはあっても、「学生が何をしたか、そして何が起こったか」を教員に語ろうとしない。「作業科学」では、作業の主観的側面や作業が行われる文脈を、学生自身の生活経験から考えることができるような課題 (添付資料 2) を含むテキスト (吉川ひろみ:「作業」って何だろう. 医歯薬出版, 2008) を使っているが、知識と実際の経験が結び付かない学生が半数程度はいる。

作業療法においては、人と環境と作業の関連の中で作業遂行を捉える。誰がどこで何をするか、より具体的に、当事者の主観を含めてみていく。人と環境と作業の強い相互関係性を重視する作業療法を展開するための評価法として、COPM (カナダ作業遂行測定, Canadian Occupational Performance Measure) と、AMPS (運動とプロセス技能評価, Assessment of Motor and Process Skills) がある。

##### ①COPM と AMPS

COPM は、クライアントがしたいことやする必要のあることを聞く面接評価法であり、AMPS は、日常作業を行う様子を観察して遂行の質を測定する観察評価法である。この評価法を使うことで、作業の視点で現象を捉えることができる。作業療法専門科目では、COPM と AMPS に関連する内容を多く取り入れ、学生の作業レンズが磨かれることを期待している。「作業療法評価学」では、学生をクライアントとした教員の面接デモンストレーションの後、学生同士がペアで COPM の演習を行う。その後、学生は友人、家族、知人など多様な年齢や背景の人に COPM を実施して記録を書く。COPM と AMPS を使った作業療法事例が掲載されている教材「AMPS 事例集」第 1 版～第 4 版 (日本 AMPS 研究会)、「COPM・AMPS スタートアップガイド」(医学書院, 2008)、「COPM・AMPS 実践ガイド」(医学書院, 2014) を使っている。

約 200 名の学生が 18 グループに分かれて学習する「チーム医療福祉演習」で扱う事例についても、作業療法の記録として COPM と AMPS の情報を記載している (添付資料 3)。

##### ②プレイバックシアター

プレイバックシアターは、コンダクターと呼ばれる司会者が観客の一人をテラーとして舞台に招き、テラーが経験したストーリーをインタビューする。その後舞台上にいる 3, 4 名のアクターがテラーのストーリーを即興で演じる。舞台端に位置するミュージシャンが楽器を

演奏して芝居の質を高める。いつ、どこで、誰が何をしたかというストーリーを共有することができ、経験から学ぶことができる。テラーの語るストーリーには、何をしたかという作業（Doing）が多く含まれ、テラーにとっての意味が込められているため、作業の主観的側面を学ぶ方法として優れていると考えている。「クリニカル・リーズニング」や臨床実習後のセミナーでは、プレイバックシアター演習を行い、学生は、自らが演じること（Doing）から気づきを得たり、他者の心情を理解したりする（添付資料 4）。プレイバックシアター演習のさまざまなエクササイズでは、作業の状況依存性と個々人の主観がクローズアップされる。

## 2) 主体性と自律性の促進

教員から学生への知識の伝達は、退屈で定着しないことは経験的にも、文献上も指摘されている。授業では、学生が主体性を発揮しなければならないような仕組みとして、ポートフォリオ面接試験、学生からのコメント、グループ課題と発表、事例検討を行っている。

上述したプレイバックシアターは、主体性と自律性を促進することにもなると考えている。ゲームやダンスなど多様なエクササイズを行うワークショップでは、主体的な行動が求められる。また、テラーが語るストーリーにより自律的判断が求められる場面を共有できる。

「作業療法評価学」では、学生は友人や家族、アルバイト先の知人などに COPM の面接の相手役を依頼する。さらに、COPM を学んだ上級生に面接の相手をしてもらった後で、質問や共感などが適切に行えたかについて評価を受ける。誰に、どのように依頼するか、という点で、この課題は学生の主体性を必要とする。

### ①ポートフォリオ面接試験

作業療法専門科目（「作業科学」、「作業療法評価学」、「作業療法研究法」、「作業適用学」）では、学生からの質問に基づいて授業を進めたり、紙筆試験を行わずに、一人 15 分間のポートフォリオ面接試験を実施している。教員から学んだことを説明するよう求められた学生は、テキストやポートフォリオを参照しながら説明する。

「作業療法研究法」では、各学生は自分で選んだテーマで文献を検索し、抄録を作成し、5、6 人のグループで抄読会を行い、授業内で発表する学生を選ぶ。抄読会 2 回、文献レビューの読み合わせ会 1 回を、授業時間外に行う。研究計画書（添付資料 5）を提出した後に、ポートフォリオ試験を受ける。

### ②学生からのコメント

すべての授業において、毎回の授業後に学生がコメントを書いて提出することを求め、主な意見を次の授業で取り上げている（添付資料 6）。専門科目では、75mm 四方の付箋紙に授業の感想、意見、質問などを記載する。ポートフォリオ試験の際に学生のコメントを返却する。複数学科の多人数授業では、出席管理を兼ねて、A4 両面に授業日を記載した個人記録を準備している。

### ③グループ課題と発表

多人数授業である「チーム医療福祉論」、「生命倫理学」では、6～10 名のグループごとに学生が選んだテーマで調べ、発表する課題を出している（添付資料 7）。これは、学生自身が

自分に選択の自由があること、将来起こる出来事をコントロールする力があることを知ってほしいからである。学科混合のグループは、馴染みが薄く、時間合わせも難しい。「チーム医療福祉論」のグループを、他の学科混合授業の「フレッシュマンセミナー」と同じメンバーにしたり、授業内でグループごとにディスカッションする時間を設けたりしている。「生命倫理学」では、2013年からプレイバックシアター風の演習を1回行った（添付資料4）。

「作業適用学」では、学生は約6名のグループでプロジェクトに参加する。2012年までは、作業療法のプロモーションをテーマとしていた。2013年からは、「地域作業療法学」との共同プロジェクトとし、期間を半年から1年間へと延長し、障害者就労、町の活性化などの地域活動に参加し、記録し、発表会で成果を報告する（添付資料7）。

#### ④事例検討

「生命倫理学」、「チーム医療福祉演習」、「クリニカル・リーズニング」では、医療福祉の現場で起こりそうな事例検討を通して学習することとしている。現実にも起こりそうな事例を読み、学生は自分が登場人物であったら、何を正しいと考えるか、それはなぜかをディスカッションする。「クリニカル・リーズニング」では、プレイバックシアターのストーリーとしてテラーに事例を語ってもらい、アクターが演じた後に、リーズニングを分析する授業を行っている（添付資料5）。

## 2. 教育の責任

全学年に渡り基礎から専門までの科目を担当している。大学院の保健福祉学専攻では、倫理系の基礎共通科目と作業遂行障害学領域の専門科目を担当している（添付資料8）。

表1 担当科目

年度	担当科目	時間	学科, 学年 (必修・選択)	受講者数
2000-2014	作業科学	15	作業療法, 1年 (必)	30名
1995-2014	作業療法評価学	15	作業療法, 2年 (必)	30名
2000-2014	作業療法研究法	15	作業療法, 3年 (必)	29名
2000-2013	作業適用学	15	作業療法, 3年 (必)	30名
2000-2014	クリニカル・リーズニング	15	作業療法, 4年 (選)	29名
1997-2013	卒業研究	30	作業療法, 4年 (必)	2名
2008-2013	生命倫理学	30	看護・作業, 2年 (必)	96名
2004-2014	チーム医療福祉論	30	5学科1年 (必)	202名
1998-2013	チーム医療福祉演習	30	5学科4年 (必)	196名
2008-2014	キャリアビジョン	2	5学科2年 (選)	13名
2014	助産学研究法	4	助産学専攻 (必)	9名
2005-2014	作業科学特論・演習	90	修士	3名
2014	医療福祉倫理学特論	15	修士 (選)	12名
2005-2013	作業遂行障害学特別研究 (修士論文指導)	—	修士	2名

2014年は非常勤講師として、広島大学医学部保健学科作業療法専攻2年生に、カナダ作業遂行モデルの講義を90分行った。

### 3. 教育の改善と成果

#### 1) 作業レンズの普及

海外講師の来日の際に、学生への特別講義を依頼し、作業レンズが国際的に注目されつつあることを伝えた。

表2 招へいた海外講師のリスト

年	テーマ	講師（所属）
2014	地域での作業に焦点をあてた実践	Alison Wicks（キャンベラ大学，豪州）
2013	作業療法の歴史と未来	Helene Polatajko（トロント大学，カナダ）
2013	作業を基盤とした，作業に焦点を当てた実践	Anne Fisher（ウメオ大学，スウェーデン）
2011	作業剥奪	Gail Whiteford（マッコーリ大学）
2010	世界作業療法士連盟の昨日，今日，明日	Ann Carswell（ブリティッシュコロンビア大学，世界作業療法士連盟副会長）
2007	私にぴったり：作業科学がいかに見方を変えたか	Alison Wicks（オーストララジアン作業科学センター，豪州）

2014年のAlison Wicks氏の授業後に、学生が講師へ書いたメッセージの例を次に記す。

I'm happy to hear your lecture. We struggle to practice occupational therapy in a non traditional placement (in a bakery working some people have an impairment) now. When I listen to your lecture, I can get some hints that we can use. Thank you very much. (3年)

Today's lecture is very impressive and valuable experience for me. I learned the importance of PEO Model in college classes. Now I understand two new things. One of them is that People's occupation affect to the earth environment, and another is that occupational therapists have to consider about environmental pollution. I think OT can do various things with occupational lens. I will continue learning with an inquiring mind as a OTS. Thank you very much for your exciting lecture. (4年)

「作業適用学」では、2009年に作業適用学の課題「作業療法のプロモーション」で、学生たちが「作業療法ってなんだろう」という動画を作成した([www.youtube.com/watch?v=fWrGsaGYmeU](http://www.youtube.com/watch?v=fWrGsaGYmeU))。心身機能障害の評価から始める従来の作業療法と、COPMを使った作業に焦点を当てた作業療法を比較して紹介している。

AMPS講習会(5日間)に参加する学生や卒業生もいる。臨床実習でCOPMを使った事例報告を行う学生が増え、AMPS講習会を受講する学生も増えた。2013年にソウルで開催された第1回国際OTIPMシンポジウムには4年生も1名参加した。2014年に東京で開催された

第2回 OTIPM シンポジウムには約 10 名の卒業生が参加した。ニューヨーク大学修士課程に留学中の卒業生は発表ポスターの前で、自発的に通訳を行い、基調講演の講師 Anne Fisher 氏から賞賛された。2014 年に横浜で開催された世界作業療法士連盟大会では、卒業生 2 名が卒業論文をポスター発表した（衣笠真理恵，奥理恵，吉川ひろみ：急性期病院で COPM を使用した作業療法士の経験。第 16 回世界作業療法士連盟大会 PPD-18-10）。

大学院修士課程では、作業に焦点を当てた学問である作業科学研究の指導を行い、日本作業療法士協会による学術誌「作業療法」に、8 名中 6 名の論文が掲載され、1 名は学会発表、1 名は査読修正中である。作業レンズを使うことの有効性を示す研究がある（望月マリ子・他：訪問作業療法における作業に焦点を当てた実践促進に関する研究。作業療法 32, 367-373, 2013；梅崎敦子・他：作業に焦点を当てた実践の条件と障壁。作業療法 27 (4), 380-393, 2008）。どうしたら作業ができるようになるかという研究もある（福田久徳，吉川ひろみ：病後の作業再開を可能にした背景。作業療法 30, 445-454, 2011）。学生の研究報告の一覧を添付資料 9 に示した。

## 2) 主体性と自律性の促進

学生からの授業最終日に、大学共通の授業評価用紙を学生に配布し、教員退出後にクラス委員が回収して、教学課に提出する（添付資料 10）。

作業療法研究法の授業では、2011 年までは最低 1 本の英語文献を読むこととしていたが、2 本目の方が楽だったという卒業研究を担当した学生の言葉により、英語文献を読む学生の苦勞を思って「最低 1 本」としていたことが、「英語文献を読むのはたいへんだ」という印象をより強く学生に与えるという失敗を冒していたことに気づいた。そこで 2012 年から、抄録を作成する文献をすべて英語文献とした。その結果、学生は無料ダウンロードできる母語が英語ではない著者のページ数が少ない論文を選択することが多くなった。そこで 2014 年には、最初の文献は American Journal of Occupational Therapy から選ぶよう指定した。その結果、学生は複数の文献をこの雑誌から選択し、抄録や研究計画書の質が向上した。授業評価においても、全学生が自主的な学習を行ったと回答した（表 3，添付資料 5，10）。この項目の平均点は 3.74 であり、学部平均 3.05，専門教育科目平均 2.88 よりかなり高い評価だった。質の高い論文が知的好奇心を刺激したのではないかと考えられる。

表 3 作業療法研究法の授業評価：「この授業に関連する自主的な学修を行った」の回答

年度	強く思う	そう思う	そう思わない	全く思わない
2014	19 (65.5%)	10 (34.5%)	0	0
2013	14 (56.0%)	11 (44.0%)	0	0
2012	13 (46.4%)	14 (50.0%)	1 (3.6%)	0

本学は、2014 年年度文部科学省選定「大学教育再生加速プログラム」テーマ I アクティブ・ラーニングに採択され、大学レベルで主体的学習が推進される予定だ。

自律的行動かどうかの判断をするための情報を得ることは困難だが、倫理研究会や倫理セミナーに参加する学生は極めて少ない。倫理研究会は、1996 年に教員有志により結成され、



2012年までは隔週で勉強会を開催していたが、2008～2011年に1～5名の学生が参加したのみだった。毎年開催している倫理セミナーは、授業の出席にカウントすることで、学生参加を維持している。

2007～2009年、文部科学省現代GPとして採択された「ヘルスサポーターマインド発達支援」プログラムでは、コミュニケーション力、倫理思考力、ニーズに気づき行動する力を育成する取り組みを行い、ロールプレイや地域活動への参加は定着している（添付資料11）。

#### IV. 研究

研究活動についても、作業レンズに関連するものと、自律性・主体性に関連するものに分けて述べたい。具体的な内容は、添付資料12に示した。

##### 1. 研究論文等

###### 1) 作業レンズ

作業療法の核が作業であると明言されるようになったのは、1990年代後半以降である。それまで作業療法の治療媒体は、活動、アクティビティ、作業活動などと呼ばれていた。私がウェスタンミシガン大学で書いた修士論文「The use of activity analysis by occupational therapists」は、作業療法士が治療として活動を選ぶ際に、何を考慮しているかを調査したものであったが、occupationではなくactivityを使った。私が1992～93年に留学していた米国でも、activityをoccupationと言い換える理論家が数名いただけだった。この研究を通して、当時の作業療法教育で必ず行われていたactivity analysis（活動の工程、必要な機能の分析）が、実践では使われていないことがわかった。私の作業への関心は、この時に始まったといえる。帰国後、日本でも同様の調査を行い、作業療法でクライアントが行う作業を決める時、作業療法士は治療目標、クライアントの興味、活動の性質や材料の入手しやすさを考慮していることがわかった（作業療法の臨床における作業分析の利用と意義、作業療法14巻3号、pp.241-247, 1995）。

1993年に読んだ論文でCOPMを知り、実践で使うために翻訳し、1998年に恩師の勧めで出版した（Mary Law 他著：COPM カナダ作業遂行測定。大学教育出版、1998）。COPMを使い続けることを通して、作業療法でクライアントが行う作業を作業療法士が決めるという前提が覆されていった。

1993年の論文で知ったAMPSについては、1997年にトロントで5日間の講習会を受講し、受講後に10名の評価結果を提出して認定評価者となった。馴染みのある日常生活課題を、楽に効率よく安全に一人で遂行できるかどうかを客観的に測定できるAMPSは、作業療法士が開発した作業療法の専門性を生かした優れた評価法であった。1998・99年度には、「在宅障害者の日常生活活動の認識と質の評価法の開発」というテーマで、科学研究費補助金（奨励研究A、課題番号10770181）を獲得し、COPMとAMPSの日本での使用について研究した。その結果、COPMとAMPSを実証研究の評価指標として使うよりも、COPM紹介記事を書いたり、講演したり、海外講師を招へいしてAMPS関連の講習会を開催や講師をすることになってしまった。それは、COPMやAMPSが前提とするクライアント中心の実践（クライアントとセラピストがパートナーになって協働するプロセス）が、従来の治療者－患者関係には馴染まず、COPMやAMPSを使う前の教育が必要となったからである。

作業療法以外の治療は、治療者が治療内容を決めることが多い。しかし、どんな作業が治

療になりうるかを、クライアントの積極的な関与なしに決めることができないということが、作業療法の特徴である。1990年代以降、カナダ作業遂行モデル(カナダ作業療法士協会, 1997), 作業遂行プロセスモデル (Fearing, 1997), 作業機能モデル (Trombly, 1993), 作業療法介入プロセスモデル (Fisher, 1998) など重要な理論が発表され、作業療法理論についての論文を書くことになった(作業療法理論の概観: 用語の意味と枠組みの違い. 作業療法ジャーナル 37 巻 7 号, pp.691-695, 2003)。

作業療法の基盤となる学問として、1989年に誕生した作業科学の知見を生かした作業療法教育のあり方を考察する論文を書いた(作業療法学の構造と基礎作業学—研究・臨床・教育の視点から. 作業療法ジャーナル 31 巻, pp.791-794, 1997)。さらに、刻々と広がり変化し続ける作業の概念について述べた(作業療法における「作業」の変遷. 作業療法ジャーナル 39 巻 12 号, pp.1160-1166, 2005)。

分担研究者として参加した高齢者の役割に関する研究プロジェクト(「慢性障害者の役割再獲得に関する研究」科学研究費補助金基盤研究(C) 平成 11・12 年度 課題番号 11835019;「高齢者の役割チェックリストの開発に関する研究」科学研究費補助金基盤研究(C)平成 8・9 年度 課題番号 0877070, 研究代表者 宮前珠子)を通して、作業療法で論じられている役割概念には、認識的側面と作業的側面があることを明らかにした(作業療法における役割概念. 作業療法 19 巻 4 号, pp.305-314, 2000)。役割の認識的側面とは、頼りがいがある、リーダー的であるなどのように、周囲が特定の役割に対して抱くイメージである。役割の作業的側面とは、会計をする、出欠確認をするなどのように、特定の役割を担う人が具体的に行うことである。役割は既存社会を維持する作用があり、個人の自由な作業選択を妨害する圧力になる(特にマイノリティにとっては)ので、作業科学に役割と言う概念を持ち込む必要はないという主張があった。それに対し、役割の作業的側面に着目することで、社会の中に新しい役割を創造することができると主張した。

作業に着目した修士論文の指導、私の博士論文作成を通して、作業の意味を考える枠組みを開発した(作業の意味を考えるための枠組みの開発. 作業科学研究 3 巻 1 号, pp.20-28, 2009)。作業科学の最初の学術誌 *Journal of Occupational Science* の 1993 年の創刊から 2008 年までの論文で、作業の意味について記載があったのは 50 編あり、その内容を整理すると、作業の意味は 8 側面から捉えることができると提案した(表 4)。この研究は、授業や研修会で、作業の意味とは何か、と問われ続けたことへの回答となった。

作業の意味を考える枠組みを使って、大学生を対象に調査を行った。同じ作業名であっても自分にとってプラスになる場合もあれば、マイナスになる場合もあった。勉強、アルバイト、飲み会などがその例だった。プラスになる作業は、マイナスになる作業よりも多くの意味を含有していることもわかった。たとえば、自分にとってプラスになる勉強という作業は、新しい知識を得ることが楽しく、勉強が目的(生活の一部)となるし、試験に合格するという目的の手段にもなる。友だちと一緒に勉強することで人とのつながりも生まれるし、歴史を知ることで時間的つながりを感じることもできる。勉強することで充実感を得ることは健康的だが、寝不足になると不健康になるし、生活習慣も乱れてしまう。一方、マイナスになる勉強は、苦痛なだけで、単位をとるための手段でしかない。(作業の意味を考える枠組みを用いて検討したプラス作業とマイナス作業の比較. 作業療法 30 巻 1 号, pp.71-79, 2011)。

表4 作業の意味を考えるための8側面

側面	詳細
感情	意味のある作業は何らかの感情を引き起こす。楽しいなどの快感情の場合もあれば、苦しい、悔しいなどの不快感情の場合もある。
目的、手段	その作業を行うことそのものが目的の場合もあれば、別の目的を達成するための手段として作業を行うこともある。
人、場所、時間とのつながり	作業を通して人と交流することがある。作業をするために特定の場所へ移動することがある。その作業が自分の過去、現在、未来をつないだり、世代間のつながりを感じさせたりする。
生活習慣	ある作業を行うこと、他の作業を行う時間も決まり、生活が組織化され生活習慣が形成される。
健康との関連	作業は健康を維持、増進する。不眠や依存など不健康を導くこともある。
自分との関連	自分らしい作業、アイデンティティにつながる作業がある
社会的意味	作業をすることで社会的役割を得る。ある作業を行うことが、その社会ではネガティブな印象を与えるなど特定の意味をもつことがある。
分類	仕事か遊び（趣味）か、義務か願望か、何らかの分類名で説明される。

### 1) 主体性と自律性

学習プロセスを可視化することで、主体的学習を奨励できると考え学修ポートフォリオの活用についての研究を行った（学習プロセスの評価：ポートフォリオ．作業療法ジャーナル 38 巻 3 号，pp.173-178，2004；ポートフォリオ面接試験．作業療法ジャーナル 41 巻 6 号，pp. 465-470，2007）。

倫理研究会の活動を通して得た知見から、倫理に関する研究も行った（クライアント中心の作業療法と対話型インフォームド・コンセント．作業療法ジャーナル 37 巻 12 号，pp.1190-1194，2003；エシックスと作業療法．作業療法ジャーナル 42 巻 3 号，pp. 194-202，2008）。2011～13 年度「リハビリテーション専門職のための倫理教育教材の開発と検討」というテーマで、科学研究費補助金科学研究費（基盤研究 C，課題番号 23613007）を獲得し、事例を使った教材を作成した（リハビリテーション倫理事例集＜<http://rehabrinri.tobihiro.jp/index.html>>）。この研究を通して、倫理的感受性を高める道具としてプレイバックシアターが有効ではないかと考えるようになった。学生の主体性、想像性、創造性を実際に確認することができるプレイバックシアターを、研究テーマとして取り組み始めた（プレイバックシアター．作業科学研究 7 巻 1 号，pp.27-35，2013）。

### 2. 研究会活動

作業療法士資格を得てすぐに、日本作業療法士協会に所属し、世界作業療法学会と会期が重なった年と病氣療養中の年を除き、1982～2014 年まで年次学会に 31 回参加している。2002 年に広島で開催された作業療法学会では企画委員長を務め、その前後 4 年間は学会評議委員だった。2005～08 年は国際部長を務め、国際的視野をもつ作業療法士の育成を掲げて活動しようとしたが、共感を得られなかった。

1993年に、米国の作業療法士資格を取得してから、アメリカ作業療法協会に所属している。海外の情報を効率的に得ることができる。会員は、American Journal of Occupational Therapy, Canadian Journal of Occupational Therapy, British Journal of Occupational Therapy が閲覧できる。

日本作業療法教育研究会に所属し、事務局（1998～2003年）、会長（2011～14年）を務めた。毎年、学術集会では、ティーチング・ポートフォリオ、プレイバックシアターなどの新規トピックで演題発表している。研究会活動の一覧を、**添付資料 13** に示した。

## 1) 作業レンズ

作業の知識の体系化を目指して1990年に創設された作業科学は、各国に研究組織が生まれている。日本では1995年から毎年、米国や豪州など海外から講師を招へいして作業科学セミナーが開催され、すべてに参加した。2006年には、日本作業科学研究会が設立され、副会長（2006～10年）、機関誌担当理事（2012～14年）、会長（2014年～）として参加している。豪州（2006年）、米国（2007年）で開催された作業科学シンクタンクに参加し、各国の作業科学者と意見交換を行った。日本の作業科学セミナーへの海外講師（Alison Wicks, 2007年、Gail Whiteford, 2011年、Helene Polatajko, 2013年）の招へいに関わり、講演を翻訳した。

2000年に設立した日本 AMPS 研究会では、副会長を務めている。米国から Anne Fisher を招いて ESI（社会交流評価, Evaluation of Social Interaction）講習会（2013, 2014年）を開催したり、AMPS や ESI を作業療法の中で有効に使うための OTIPM（作業療法介入プロセスモデル, Occupational Therapy Intervention Process Model）講習会（2011年）を開催した。2013年にはソウルで開催された国際 OTIPM シンポジウムで講演した。2014年は横浜で第2回国際 OTIPM シンポジウムを開催した。

2013年に、作業遂行研究会を設立し、カナダから Helen Polatajko 氏を招いて、COPM を使いクライアント中心に治療を行う CO-OP（Cognitive Orientation to daily Occupation Performance）アプローチの講習会を、東京と広島で開催した。

## 2) 主体性と自律性

本学の前身である広島県立保健福祉短期大学の専任教員で倫理学を担当していた岡本珠代氏と共に勉強したいと考え、1996年に倫理研究会を設立し、関連文献を読んだり、調査を行った。毎年倫理セミナーを開催し、学内の学生や教員、学外の医療福祉専門職の参加を得てきた（**添付資料 14**）。2013年には、文部科学省研究助成金により、カナダの作業療法士で「倫理的作業療法実践の枠組み」を執筆した Ron Dick 氏を招へいして倫理セミナーを開催した。2014年には、劇団プレイバックから3名を招へいして、プレイバックシアターによる倫理的問題状況の共有を図った。

## V. サービス

### 1. 作業療法士の継続的専門能力発達への貢献

研究会活動の多くは、私にとっては研究よりもサービスである（添付資料 15）。作業ができることを目標としたクライアント中心の実践こそが作業療法だと明言しているカナダ作業療法士協会が、1997年に出版した作業療法ガイドラインを、是非日本に紹介したいと考え、有志を募って翻訳した（カナダ作業療法士協会著：作業療法の視点 作業ができるということ。大学教育出版、2000）。2007年には続編が出版されたので、大学院のゼミで輪読した後、同僚と共訳した（E・タウンゼント、H・ポラタイコ著：続・作業療法の視点。大学教育出版、2011）。都道府県ごとの作業療法士会の学会や研修会、卒業生や臨床実習指導者などの求めに応じて、クライアント中心の実践、COPM、AMPS、作業科学といったテーマで講演を行っている。COPMに関する質問は、特定 NPO 法人 POTA のウェブサイトで回答している（<http://8113.teacup.com/copm/bbs>）。1998年から COPM ニュースを不定期に発行しており、最新版は 26 号である（<http://www.npota.com/ot/copm/>）。

卒業生や知り合いの作業療法士からの求めに応じて、作業療法学会、作業科学セミナーへの演題発表の支援を行っている。発表を奨励することもある。

学生が臨床実習中の施設訪問の際には、施設側の希望を聞き、COPM と AMPS の実演や勉強会を行うこともある。

2000年から始まった AMPS 講習会約 50 回のうち 20 回以上で講師をしている。AMPS 講習会で使用するマニュアルの翻訳の一部と校正を担当している。AMPS 講習会の開催数増加のため、新規講師の指導を行っている。幼稚園や小学校の教室内で使用できるスクール AMPS のマニュアルの翻訳と校正、世間話や買い物などの場면을観察して社会交流技能を測定する ESI のマニュアルの翻訳の一部、ESI 講習会開催準備や運営を担当した。

AMPS 講習会受講者を中心として、月 1 回開催している勉強会「Friday AMPS」に参加している。最新情報の紹介や、英語圏からの講師が参加した際の通訳をしている。

英語圏の講師が行う ESI 講習会、OTIPM 講習会、CO-OP 講習会では、マニュアルや資料の翻訳、講義の通訳を行っている。国際 OTIPM シンポジウム、2014 年の世界作業療法士連盟大会ワークショップ、英語圏の作業療法士による学内での特別授業での通訳を行った。

COPM と AMPS を、真の作業療法実践のための道具と位置づけた講演をしたことから、出版社の提案で書籍を出版した（作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド、医学書院、2008）。その 6 年後、学部卒業生 2 名、大学院卒業生 1 名、同僚作業療法士 3 名、他 7 名と共著で、続編を出版した（作業療法がわかる COPM・AMPS 実践ガイド、医学書院、2014）。

OTIPM の詳細が記された書籍「Anne G. Fisher: Occupational therapy Intervention Process Model: A Model for Planning and Implementing Top-down, Client-centered and Occupation-based Interventions. Fort Collins, CO; Three Star Press」を、大学院生や同僚などと共訳した（作業療法介入プロセスモデル：トップダウン、クライアント中心、作業を基盤とした介入の計画と実行。日本 AMPS 研究会、2014）。研究会のウェブサイトからの入手希望者に対して郵送している（<http://amps.xxxxxxxx.jp/material.html>）。

## 2. 作業療法の発展のための貢献

日本も含めて世界中に作業レンズが普及していくことを目指している。病名や障害種別で人を区分することを止め、どんな作業をすることが適しているかを、本人を中心としてみんなで考え、その作業をできるように（可能化）取り組んでいくという視点が普及することで、より健康で安全な世界になるだろうと考えている。作業レンズをもつ人々が連帯して力を蓄えるために、講習会や講義の通訳を通して、海外の講師に日本での取り組みを伝えようとしている。2013年（ソウル）、2014年（東京）で開催した国際 OTIPM シンポジウムは、韓国の作業療法士と協議しながら企画、運営した。

40歳で脳卒中を発症し右片麻痺となった葉山靖明氏は、病院の作業療法室でパスタ料理を作ったことで自信を取り戻したという経験をもっている。ところが、病院退院後の地域のデイサービスでは身体機能訓練だけで作業療法がなかった。そこで、自ら会社を設立しデイサービスを運営している。そして「だから作業療法が大好きです！」（三輪書店、2012）を執筆した。会社設立後まもなく、同僚教員が葉山氏に拙著『『作業』って何だろう』（医歯薬出版、2008）を贈呈したことから葉山氏と知り合いになった。この本の内容を海外に紹介したいと思い、本学英語教員と共に英訳し、全冊買い取りで出版した（Hayama, Y., Yoshikawa, H., Buthoud, T.E.: Look at What You Can Do!. Miwa-Shoten, 2014）。30冊は、世界作業療法士連盟大会で来日した知人作業療法士に配布した。

## 3. 地域貢献

大学の附属診療所では、幼児から高齢者まで約10名の作業療法を担当している。附属診療所の作業療法の一部は、教育及び研究とも関連している。2015年1月は、専従療法士として兼務し、セラピスト教員への連絡業務も行っている。

オープンキャンパスでの学科紹介（2013、2014年）では、クライアント中心の作業に焦点を当てた作業療法を紹介している。高大連携公開講座「作業療法入門」（2005年～）では、作業科学を講義している。法律や進路選択のための資料では作業療法をリハビリテーション医療の一職種として紹介されているが、現在の作業療法は進歩しており、作業レンズを通して現象を理解し、作業療法独自の方法で介入を行うということを伝えている。

医学書院からの依頼で、週刊医学界ニュース（2014年7月14日号）に「COPMの活用で、当事者主体の作業療法を」と題した記事が掲載された（[http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03084\\_04](http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03084_04)）。作業レンズを使った作業療法の広報になると考えている。

ものづくりサークル「作ら（さくら）」の活動に参加し（2012年～）、年齢や障害の有無にかかわらず、興味のあるものづくり活動に参加できる機会を作っている。参加者が様々なものづくり作業を通して、身体的、精神的、社会的に良好な状態を維持し、作業が行える地域社会を創りたい。特定NPO法人ちゃんくす創設時に理事を務め（2009～2014年）、ちゃんくすで行われている手芸クラブ「智恵子の手仕事クラブ」に参加し、多様な作業ができる地域づくりに貢献しようと考えている。このクラブの主催者である岡田智恵子さんは、脳性麻痺のため12歳までに2回、筋緊張の高い下肢筋の腱を切る手術を受け、両手に杖をつけて歩くことを強要されていた。高校受験のために「リハビリ」を止めて車いすで学校に通い、大学へは自動車で通学した。ピアカウンセリングやケアマネージャーとして仕事をしている。

ビーズ細工が趣味で、三原市の名産である達磨に因んだオリジナルビーズ作品を作っている。2014年12月に、クラブ参加者が協議して、このビーズ細工キャラクターを「ビーズ達磨のはらのすけ」と命名した。2月の神明市で販売するために、作品を制作している。

障害者の生活や社会参加をサポートするボランティア団体三原ケアネットワークのメンバーとして、やっさ祭りの障害者参加のための研修会に協力している。1998年から人にやさしい祭り委員会の活動に関わり、「明日に架ける橋」チームの参加登録システムの完成に関与した。参加登録用紙を当事者用とボランティア用に分けず、同一用紙に要援助事項と援助可能事項の項目を作った。やっさ祭りの前に、踊りの練習と介助法練習を兼ねた研修会を開催し、祭り後には交流会を開催することが定着した。現在は、三原市のボランティアセンターや、本学ボランティアサークルの学生が中心に行っている。

プレイバックシアター劇団「しましま」を2013年に創立し、月2回程度、約1時間練習している。本学の倫理セミナーでは、劇団プレイバックーズとの合同公演を行った（1月8日、[http://www.playback-az.com/20th/index\\_20th\\_joint\\_independence.html](http://www.playback-az.com/20th/index_20th_joint_independence.html)）。8月24日には、地域包括ケア推進講演会市民公開講座「終活セミナー」で、在宅での看取りをテーマに公演を行った。2013年には、スクール・オブ・プレイバックシアターの研修コースに4回参加し、技能向上に取り組んでいる（添付資料16）。

#### 4. 教育と研究を支える業務

大学内で教授として確固たる地位を築くことが、教育理念に沿った活動を可能にするかもしれない。作業療法学科長（2009～12年）、総合学術研究科保健福祉学専攻長（2013年～）の業務は、馴染みがなく、不合理なことも多かったが努力した。ハラスメントの訴えがあった場合には、ハラスメント委員会委員（2011～）として、関係者全員から一人ずつ話を聞くので多大な時間を要した。

県立大学の教員として、広島県私立学校審査会（2013年～）、三原市行財政改善懇談会会長（2014年～）を務めている。

## VI. 教育，研究，サービスの統合

作業レンズの普及、主体性と自律性の促進という理念は、徐々に教育と研究に通底してきているように感じる。作業レンズで見えることは、見ている自分の主体性と自律性を必要とする。レンズの向こうに見えるものは、人と環境と作業の重なり合った結果であり、当事者の主観を含めて理解する必要がある。その当事者が主体的、自律的であれば、そこに見える風景は、より明確な意味を醸し出すことになるだろう。

知識を受け取るだけの受け身の若年者を演じる学生は、作業の意味を深く考えることを拒むことがある。主体的態度よりも、周囲との協調を重視しているようでもある。教育理念を言葉で示し、多様な教育方法を試み、結果を吟味しながら前進していきたい。他の教員にティーチング・ポートフォリオ作成を勧めることで、協働して教育していくことができると考えられる。大学内で学生への教育方法を工夫するだけでは不十分である。学生が臨床実習を行う病院や施設で働く作業療法士や関連職種が、現在の作業療法を知る必要がある。学生は、友人や家族に実際にCOPMを実施することで、自らが学びながら作業療法を伝えるという地域貢献を行うことになるだろう。公開講座や出版物を通して広く作業療法を伝えることで、

真の作業療法教育が実施しやすくなると考えている。

私がプレイバックシアターのコンダクター（司会）として上達することにより、参加者の経験がより有意義に共有できる。劇団しましまの練習、ワークショップ、公演を通して、団員のアクターとしての技能が向上することで、地域貢献の質が高まり、教育への活用の幅が広がる。2014年12月14日に長野医療技術専門学校（長野市）で開催したプレイバックシアターのワークショップには、学生、他職種、以前の私の作業療法の患者など約100名が参加した。参加者の「楽しかった」という感想や、学生が普段見せない生き生きとした態度だったと教員が述べたことから、地域貢献と教育に効果があったと推測できる。

教育を通して、実践報告や論文指導をした研究が生まれている。行っている多くのサービス活動は、理念と共鳴するものもあれば、理念を下支えするかもしれないし、しないかもしれないものもある。大学は2016年から経営学修士の課程新設準備をしており、作業療法学科の教員数を減らそうとしている。大学予算は毎年削減されている。各部署は自分の権益維持に懸命で、他部署の困難には関心を示さない。誰のどのような権力が優位に働いているのか、推測を困難にするような、核心となる価値を見出すことができない方針が急に出されることが少なくない。何を言っても変わらない、誰に言ったらよいかわからない、といった状況で、主体性や自律性を放棄した態度がはびこる危機が近づいてくる。大学はこのような状況から脱却することはないだろうが、作業レンズの普及を目指して、主体性と自律性を少しずつ促進していきたい。その先には、自分が何をするか（作業）を重視して、豊かに作業を行うことにより未来の自分が形成されていく。これが多くの人に起こることで私たちのよりよい社会が創造されていくと信じている。



図1 教育、研究、サービスの統合



## **VII. ビジョンと行動計画**

### **1. ビジョン**

「自分が何をやるかが、未来の自分を作り、私たちの社会を創る」という信念を、多くの人がもつことにより、世界が健やかで豊かで安全になる。

### **2. 行動計画**

#### **1) 作業レンズの普及**

真の作業療法は、常に作業レンズを通して行われる。作業レンズで現象を見続けるための手段として COPM と AMPS の使用が有効だと考えている。COPM 第 5 版は 2014 年に出版され、36 カ国語の翻訳版が COPM のウェブサイトから販売される予定となっている。この翻訳と周知を行う。作業中心の実践を導くツールとして、AMPS の他に、スクール AMPS、ESI、OTIPM が開発されている。これらの有効活用のための執筆、講演、研究を行っていききたい。まず、2015 年 5 月にソウルで開催予定の第 3 回 OTIPM シンポジウムに周囲の作業療法士を誘い、積極的に参加する。現在行っている ESI 研究（附属診療所で小児科医との共同研究、児童養護自立施設での研究）を論文として投稿する。日本作業科学研究会会長として、作業レンズの普及に資する活動に重点的に取り組んでいく。

#### **2) プレイバックシアターのスキルアップと機会拡大**

作業レンズの普及、主体性・自律性の促進の手段として、教育、サービスにおいてプレイバックシアターの可能性は大きいと感じている。今後は研究テーマとしても取り組んでいきたい。質の高いプレイバックシアターを実践するためには、まず私のスキルアップが不可欠である。2015 年 7 月にモンテリオールで開催される世界プレイバックシアターネットワーク大会に参加して、ヘルスケア専門職教育としての活用について意見交換を行う。

#### **2) 全ての人のための作業機会の拡大**

全ての人が自分の作業を通して豊かな人生を送るためには、どんな人でも作業を選び行える機会が保障される社会が必要である。地域活動をしている団体などと協働して、インクルーシブな作業機会を創出していく。ものづくりサークル「作ら」や「智恵子の手仕事クラブ」への参加、学生の地域プロジェクトの内容を発展させていく。

## **VIII. おわりに**

今回のアカデミック・ポートフォリオ作成により、私の活動の核が明確になったことで、教育、研究、サービスの効果的な循環を可能にするための糸口を探るという目的を達成できた。教育の対象は、学生だけでなく、作業療法士や他職種であり、地域住民でもある。業務負担でしかないと感じられた学内外の委員会の仕事を、作業レンズで見ることによって、どのように行うかを丁寧に吟味することができる。今日私が何をしたかが、明日からの私がどう存在するかを決めるのだという覚悟で、すべての仕事、活動、業務に臨みたい。そのどれもが、明日からの私を形成する作業になりうるのだから。こうした生き方を選ぶ人々と一緒に、私たちの社会を創り、新しい価値を見つけていくことができそうな気がする。